

教師の「コメント力」と「聴く力」 過剰、心を傷つけるコメントは己の未熟さ故だ バッカーズ寺子屋塾長・木村貴志

産経新聞 2017.2.15

<http://www.sankei.com/life/news/170215/lif1702150022-n1.html>

知的刺激に満ちたアクティブな学びの空間を作るためには、「学生（生徒）が相互に学び合う状況を作ること」「教師が学生との双方向の言葉のやりとりを増やすこと」の2つが大切だ。

私が専門学校で実施する全8講座の「志の教育」プログラムでは講座ごとに2枚のリポートを課す。テーマは「講座を受けて感じたこと、気づいたこと、学んだこと（考えたこと）」だ。提出された全員のレポートに、私は必ずコメントを書いて次の講座の開始時に返却する。同時に、心に響いた数人分をタイプし、クラス全員に配布して読み上げる。タイプする理由は、誰が書いたかを分からなくし先入観を取り去るためだ。読み上げるのは内容の共有を徹底し共感度を高めるためだ。

学生たちは同じ講座を受けているのに、得ているものはそれぞれ大きく違うことに気づく。教室で机を並べている級友の考えの深さに驚き、自身の未熟さを自覚する。そこに級友への共感や敬意が生まれ、自ら発奮し向上しようとする意識が芽生える。

若者の多くは、「聴く」ことが「聞き流す」ことになり、「読む」ことが「活字を眺める」ことになっている。学生たちは、聴き方・読み方の習慣を変えれば、自分で考え、書く・話すというアウトプットの力が大きく伸びることに気づく。

それが学ぶ意欲を変える。学生が真剣に全講座に参加するか否かは、こちらが学生の言葉に対して、真剣勝負をしていることを伝えられるかどうかにかかっている。一度でも手を抜けば得られるものは半減する。

レポート提出など、ありふれた教育現場の日常風景だが、どれだけの思いをもって実施し、どのように活用するかで、得られる成果は天と地ほどに違う。

次に、教師が学生との双方向の言葉のやりとりを増やすことが大切だ。確かに聴き方が変われば、学生のコメント力は高まる。だが、その力をさらに伸ばすのは教師のコメント力だ。教師の側に、学生のコメントに対して間髪入れず「全員に・平等に・的確に」コメントを出す力が必要だ。自分にできないことを学生にだけ求めても、その力は身に付かない。同じ土俵に立って範を示すことが大切だ。

コメントの際に、私が意識していることは、「触発されて心に浮かんだことを話す」「感銘を受けた箇所など、感情を交えて正直にコメントする」「発言した勇気に心からの敬意と感謝を表し、指摘すべきことには心を込めて改善のアドバイスをする」などさまざまだ。大切なのは嘘偽りなく言葉を発することだ。

先日、2週間の「志の教育」集中講座を高校3年生対象に実施したところ、私が生徒のコ

メントに対して5秒以内には必ずコメントを返しているという報告に書いてあった。書いた生徒は、全員の意見を私が真っすぐに受け止めていたことがうれしかったのだ。コメントをすぐに返すためには、誰よりも集中して真剣に聴いていなければならない。問われているのは教師の「聴く力」でもある。

コメント力の根源は詰まるところ人間力と教育への情熱だ。過剰なコメントも心を傷つけるコメントも、己の未熟さ故だ。心を磨き、専門性を高め、幅広い教養を身につけるしかない。

富士山の名画を数多く描いた日本画の巨匠、横山大観は次のような言葉を残した。「…富士を描くということは、つまり己を描くことである。己が貧しければ、そこに描かれた富士も貧しい…」教育も同じだ。己の人格を磨き、言葉と行動を磨くしか教育をより良いものにする道はない。

【プロフィール】 木村貴志

きむら・たかし Vision&Education, Ltd. 代表取締役。バッカーズ寺子屋・バッカーズ九州寺子屋塾長。

<http://v-edu.co.jp>